

中国残留日本人孤児

滝本 栄七（大正 15 年生まれ）

昭和 20 年 8 月 15 日は何の日であるか、と聞いても期待した回答が得られない若者が多い平和な日本となった今、それは忘れることの出来ない戦争から解放された終戦の日なのであるが、終戦当時に旧満州に居た軍人、一般人、満州国の建国の美名の下に大陸の新天地に送り込まれた満蒙開拓団等 230 万人の日本人にとっては、飢えと酷寒と重労働の不当なシベリア抑留の生活、想像を超えた悲惨な逃避行の末、親と離れ離れになった孤児達にとっては、苦難に向けての第一日となった日であることも忘れることが出来ない。

当時私の姉は、関東軍がソ満国境で最強の重要陣地として構築した東寧要塞内の守備隊官舎に居た。戦車隊は既に硫黄島に転進して玉砕し、兵員も南方に転進してソ連軍が侵攻してきた時には要塞とは名ばかりの弱体なものとなっていた。軍の上層部ではソ連の参戦近しの情報に、密かに家族を内地に送ったとも言うが、8 月 9 日早暁、緊急に避難を知らされて自らは出産を控えた身重の体で 2 人の幼児を抱えての避難となった。どのような思いで避難したのであろうか、想像するだけでも心の震えを抑えることが出来ない。大混乱の避難列車に乗車することが出来たのも束の間、ソ連軍の攻撃で列車は運行不能となり、機銃掃射の銃撃音と重戦車の轟音の中、徒歩による広野の過酷な死の逃避行となった。姉は避難開始から 3 日目に医療器具一つない山中での出産となり、避難群から離れることとなった。我が子を同行者に託すほか命を救うすべがなく、幼児は声の続く限り母を呼び、母はわが子の無事を祈り再会を念じつつ親子が離れ離れとなった。ソ連軍の銃撃や暴民に怯え、食料もなく、大陸特有の豪雨にうたれても雨具一つなく全身濡れねずみ、夜は草を集めて狼の遠吠えのする大地に吸い込まれる様に眠る。目を覚ませば広野を彷徨う。まさに鬼にむち打たれて逃げ惑う生き地獄の有様。疲労と栄養失調とで 1 日の行程は牛の歩みより遅くとも息を引き取るまで、只管わが子の後を追い続けたことと思う。我が子とはぐれ人間らしくこの世を去ることもなく広野に消えた姉達。我が運命を思い最後に脳裏を去来したものはなんであろうか。墓標すらも建ててやることが出来ず残念に思う。消息不明のまま日中間の国交もなく探す手立てもないまま歳月は流れに流れて往った。

昭和 56 年厚生省から母宛に、第 1 回中国残留日本人孤児肉親探し対面調査に出席するようとの連絡があった。母は九死に一生を得て養父母の愛の手に助けられ残留孤児として生きていた孫ではないかと対面した。しかし類似点が幾つもありながら決め手となるものがなく、調査会場のオリンピック記念青少年センターで老母の膝に顔を埋めて号泣した孤児の無念の姿が同席した私たち兄弟 4 人は今も忘れることは出来ないでいる。それは終戦から既に 36 年も経ち、日中国交回復してから 10 年も過ぎていたのであった。年を追う毎に当事者の記憶が薄れていく中、国の対応の遅すぎたのが非常に悔やまれてならない。

平成 11 年 8 月中国瀋陽市（旧奉天）で日中両国政府代表も参加して開催された中国残留日本人孤児中国養父母に感謝の碑除幕式に出席しました。敗戦の混乱の中、中国に取り残された日本人

孤児を我が子同様に育ててくれた中国養父母に感謝の気持ちを表したいという中国残留孤児の切なる要望を受けてようやく建立の運びとなったのです。式典では帰国孤児代表から大要次^{たいよう}の挨拶がありました。「養父母に感謝の碑の建立は私たちの長い間の願いでありました。半世紀前に日本の軍国主義者が起こしたあの戦争は、中国人民に計り知れない傷を負わせました。と同時に日本国民にも癒^いしても癒^いしきれない傷を負わせてしまいました。私たち残留孤児の多くは未だに自分の本当の名前も分からず、肉親にも会えないでいます。私たちのような国があってもその国に戻れず、家があってもその家に戻れない敵国の子供を救って下さいました中国のお父さんとお母さんは私たちを育てるために自分の食べ物を減らしてでも私たちに与えて下さいました。又自分の着るものを寒がる私たちに着せて下さいました。そして中国のお父さんとお母さんは、それほど大事に育ててくれた私たちを日中国交回復後には、悲しい別れを忍び涙を拭いながら自分の元から日本へ送り出して下さいました。今私たちは日本に帰って参りましたが慈しみ深い中国の養父母のことを一瞬たりとも忘れた事はありません。それゆえに子々孫々の心に中国養父母の心^{ししそんそん}を伝えていきたいと思い、本日ここに感謝の碑を建立するまでに至りました。養父母が私たちを育ててくださったことを、そして養父母の名前を永遠に歴史に残して行きたいのです。最後に日中両国の繁栄と日中両国の人々の幸福を願いながら、お父さんお母さんが健康で長生きされることを心からお祈りいたします。」

旧満州では犠牲になった孤児達は数千人という。国内でも浮浪児^{ひろうじ}狩りに逃げ惑^{まど}う戦災孤児たちの悲惨なあの姿があった。戦争とは消えることのない深い傷跡を残し、今私達が戦争について何を知り何を論じても戦争の犠牲になった人達の無念に思いを寄せるとき、絶対に不戦を誓うほか慰める言葉がないと思う。